
紙コップ

黒猫紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紙コップ

【Nコード】

N1487V

【作者名】

黒猫紅葉

【あらすじ】

二人の男女を中心に三題噺のような物をやります。
あくまで三題噺のような物です。

話は繋がっていたり、いなかったりしますので一話から順番に読むことをオススメします。

はじめに

紙コップとは。

私が高校時代に所属していた演劇部にあつた即興劇の事。

紙コップに入ってるお題を引き、お題にそつて即興をするのだ。

普通は一種類のお題をやるのだが、複数の紙コップを混ぜてやった事もある。

私は紙コップを小説でやろうとしている。

つまり、複数のお題をランダムに引いて書くのだ。

さらに言えば、三題噺のような物だ。

さて、ここから紙コップの「しぼり」について書く。

一つ目は場所。

学校の教室から赤ずきんの森まで、ありとあらゆる場所。

ただし、場所が童話の世界でも主人公が童話の登場人物になるとは限らない。

二つ目は小道具。

基本的に物だが、動物なども役割上ここに分類する。

話の中に必ず登場させる事。

三つ目は最初と最後のセリフ。

文字通り、そのまま。

この三つを紙コップからランダムに選ぶ。



尚、この小説は自身の想像力の為に書く物であり、自己満足で終わる可能性が高い小説です。

その事をご理解した上でお読み下さい。

それでは、どうぞいゆっくり。

登場人物

この小説は主にこの二人で構成されます。

●マコト

性別：女の子

身分：学生

年齢：高校生くらい

容姿：小柄 肩まである髪を二つに結んでいる事が多い

●カナデ

性別：男の子

身分：学生

年齢：マコトより二つ年上

容姿：マコトより頭一つ分背が大きい 襟足を妙に伸ばしている。

1話、足元の黒猫（前書き）

今回のお題。

場所：炎天下の公園 小道具：足元の黒猫

最初のセリフ「空は青いですよ。とても綺麗です」

最後のセリフ「今日ぐらいいいじゃん、羽目外したって！」

1話、足元の黒猫

太陽が照りつける炎天下の公園にセーラー服を着た一人の少女が足を踏み入れた。

肩まである髪を二つに結び、首に掛けているカラフルなタオルが少女の汗をたっぷり吸っている。

重たそうに、そしてだるそうにスクール鞆を持つ少女の名前はマコトという。

マコトはあまりの暑さで子供すら遊んでいない公園に呼び出された。

その呼び出した張本人はちょうど木陰に入っているベンチに優雅に座っていた。

ベンチに座っている空色のＴシャツを着た青年の名前はカナデという。

あまりの暑さに妙に伸ばした襟足をちょこんと結んでいた。

マコトの存在に気づいたカナデが顔を上げた。その顔には汗ひとつ無い。

「空は青いですよ。とても綺麗です」

カナデの言う通り、空は濃く深い青色。雲一つ無い晴天だった。

「そんなこと言う為にわざわざ呼び出したわけ、カナデ」

マコトは手に持っていた紙ヒコーキをカナデに投げつけた。

それを受け取ったカナデはふわりと笑った。

「ちゃんと届いて良かったよ。まあ、マコト座りなよ」

マコトはカナデの隣りにドカリと座った。マコトはすこぶる不機嫌だった。

学校の講習の帰り、カナデの飛ばした紙ヒコーキに呼び出され炎天下の中歩いてきたのだ。

背中まで汗べったべたで、マコト自身溶けそうだった。

「風はいつだってカナデの味方じゃん。それで、なんで呼び出したの？」

今更だが、カナデはマコトより二つ年上だ。しかし、マコトはカナデに気を遣ったしやべり方を全くしない。

「実は飼い主を探して欲しいんだ」

そう言つて、カナデは足元を見た。そこには一匹の黒猫が寝そべっていた。

首輪も無い猫。けれどこれだ人間に近く寄り添えるなら野良猫じゃないなとマコトは判断した。

「ふーん。手がかりとかは？」

「無いよ」

「じゃあ、どうやって探すのよ」

「…猫が知ってる」

「頭おかしいでしょ」

そう言われてもカナデは否定も肯定もせず、ただ微笑んでいた。

「もー、暑くて耐えられない！ジューズ買ってくる」

スクール鞆からマコトは小さながま口財布を取り出して立ち上がった。

「僕、サイダー」

マコトはカナデの投げた百円玉を受け取り、公園の外にある自動販売機まで買いに行った。

ベンチに残ったのはカナデと黒猫。

「レイコさん、マコトいい奴でしょ」

カナデの足元で寝そべっていた黒猫がぐいっと首を上げてカナデ

を見上げた。

「元気で素直な娘だな」

「マコトの家族も賑やかでいい人達ですよ」

「そうか、カナデが言うなら間違いないだろう。あの娘の家に世話になるか。カナデ、娘を説得できるか？」

「それは、任せてください」

カナデが微笑むとレイコさんは満足したように、また地面に寝そべった。

戻ってきたマコトはカナデにサイダーを渡すとベンチに座り、オレンジジュースを一気に呷った。

「ぶはー！ー！生き返る」

豪快にオレンジジュースを飲むマコトとは対照的にカナデはちびちびとサイダーを飲んだ。

「ねえマコト、レイコさんをしばらく預かってくれないかな」

「はあ？…レイコさんってその猫？」

「うん、そう。マコトの家って前猫飼ってたよね、だから…レイコさんが元の場所に帰れるまで」

「つまり、飼い主を探せばいいんでしょう。それなら多分いいんじゃない。でもこのお嬢様がカナデから離れるの？」

黒猫はカナデの足元ですっかりくつろいでいる。

カナデがあずかるのが一番いいんじゃないかと口には出さなかったけどマコトは思っていた。

「レイコさん」

カナデが声をかけると黒猫はゆっくりと身体を起こし、マコトの前にスツと座り直すと深々と頭を下げた。

「レイコさんがお願いしますって」

「あつ、こちらこそお願いします」

マコトも慌てて頭を下げた。なんて行儀のいい猫なんだろうとマ

コトはただ感心した。

「それじゃあレイコさん、我が家に案内するわ。カナデ荷物持つて」
「なんで僕が」

「カナデの頼みを聞いてあげたのよ。…じゃあ荷物はいいわ、アイヌおこつてよ。こう暑くつちや帰るのもしんどいわ」

「…アイスクらいなら」

「やった！じゃあ、ジャンボパフェで」

「マコト、ジャンボパフェなんて食べきれないよ」

「今日ぐらいいいじゃん、羽目外したって！」

カナデは呆れて溜め息をついた。しかしマコトはそんな事おかまいなしにカナデを引っ張って公園から出て行った。

1話、足元の黒猫（後書き）

初っぱなのくせに、組み合わせ良かった。

2話、授業中の渡り廊下（前書き）

今回のお題。

場所：授業中の渡り廊下 小道具：丸めた新聞紙

最初のセリフ「なんであんなのお守りしなきゃいけないのよ!」
最後のセリフ「今日はとても良い風が吹きます」

マコト視点

2話、授業中の渡り廊下

夏休み、講習しか行われない学校はいつもより静かで授業が始まればその静けさは増す。

そんな静けさの中、私は校内中を歩き回っている。
この男のせいで。

「なんであなたのお守りしなきゃいけないのよ！」

「もう帰る所だったんじゃないの？」

私の後ろには私より頭一つ分背の高い男が歩いている。

オレンジ色のTシャツに短パン、いつそ切ってしまうばいい伸びた襟足は今日も一つに結んでいる。

そんな涼しげな格好をしたカナデを見るとセーラー服を真面目に着てる自分がバカバカしく思えてくる。

なんで私カナデと一緒に校内を歩き回っているかというところ、講習が終わって帰ろうと校舎から出ようとした時にカナデと出会ったのだ。

カナデは古文の坂崎先生に図鑑のような本を返しに来たらしい。だから重そうな本を持ってるのはわかるけどカナデはなぜか丸めた新聞紙持っていた。

そこについては詳しく聞いてない。私はただカナデを職員室に案内すればいいだけだったから。

でも、そう簡単に終わらなかった。

問題の坂崎先生は職員室にいなかった。

「坂崎先生なら図書館にいるんじゃないかな」

と言われ、校内を知らないカナデが図書館の場所を知ってるはずもなく私が図書館まで案内する事になり、

図書館、資料室、視聴覚室、トイレまで探しても坂崎先生はいなかった。

それで原点に戻って職員室に戻ってみた。

やっぱり職員室に坂崎先生はいなかったんだけど、近くにいた先生に聞いてみたら

「あゝ、坂崎先生なら屋上にいるんじゃないかな。最近あそこがお気軽に入りやすいから」

と言われ、屋上に向かっていると。

まったく、どんだけ自由な先生なんだ！！

三階の渡り廊下を渡りきろうとした時、後ろを振り返るとカナデが渡り廊下の真ん中で立ち止まっていた。

「どうしたの？」

ふわりと風がカナデの髪をなでた。まるで猫のように目を細めて気持ちよさそうだ。

「……きつと、ここで待ってれば来ると思うから」

そう言って、日陰に入った。もう完全にあそこで待つつもりだ。

私はカナデの隣りに立った。

カナデは時々こういう事を言う。私のところまで紙ヒコーキを飛ばせる奴だ。

私とは違うものや世界が見えているんだと思う。

「また風が教えてくれたの？」

「そんなところだよ」

渡り廊下は凄く風通しがいい。この渡り廊下は屋根があつて日陰を作ってくれるのがまだ救いだった。

カナデは丸めていた新聞を広げて読み始めた。しかもよく見ると英字新聞だ。

私はカナデの事をよく知らない。なんでこの男と一緒にいるのかもよくわからない。

カナデの方が私より二つ年上で、学校の先輩でも、幼なじみでも

ない。

カナデは私の家を知ってるけど、私はカナデがどこに住んでるのか知らない。

私は高校生だけど、カナデが何者なのか知らない。

どうして私はこの男と出会ったんだろう。

「新聞、何て書いてあるの？」

「さあ？」

「えっ、読んでないの？」

「だって、読めないから」

「はあ？じゃあ何で持ってるの」

「英字新聞って持ってるだけで頭良さそうに見えない」

「Ｔシャツ、短パン男がなに言ってる。

「いや、丸めて持ってたら駄目でしょ」

英字新聞だろうが丸めて持ったら虫退治かチャンバラにしか見えない。

「えっ、そうなの。新聞と言えばコレだと思ってた」

冗談でもなく、カナデの顔は真剣そのものだった。

天然だ。うすうすそうじゃないかと思ってたけど、この人本物だ。

「あつ、坂崎さん」

校舎からアロハシャツにジャージという、とても先生とは思えない格好の坂崎先生が歩いてきた。

これで女子に人気だっていうんだから最近の女子高生は変わってると思う。

「おっ、カナデ君。久しぶり」

「お久しぶりです」

カナデと先生は楽しそうに話し始めた。

…さっきまで私の隣りにいたくせに。まあいいや、私の役目も終

わったしさつさと帰ろう。

「じゃあ、カナデ。私帰るから」

ヒラヒラと手を振って二人に背を向けた。

「マコト、今日はありがとう」

「どういたしまして」

私は振り向かなかった。振り向けばカナデの思い通りみたいで悔しかった。

「マコトっ!」

「なに」

つい振り向いてしまった。名前呼ばれたら普通振り向いちゃうから!

「今日はとても良い風が吹きます」

あまりに無邪気に笑うカナデ。彼の髪をそそよと風が揺らしている。

私は知っている。

カナデの周りはいつだって優しい風が吹いている。

3話、不思議の国のアリスのお茶会（前書き）

今回のお題。

場所：不思議の国のアリスのお茶会 小道具：片方だけのスニーカ

I

最初のセリフ「なんでこうなるの、私が一体何をしたっていつの！」
最後のセリフ「僕は君を離したりしないから」

カナデ視点。

3話、不思議の国のアリスのお茶会

鬱蒼と茂る森の中、僕たちがいる場所は場違いなほどに明るく、原色に溢れていた。

木々に色とりどりのランプをつるし、ひたすらに長いテーブルに並べられた椅子。

ケーキ、紅茶、プディング、カップ、クッキー、ポット、タルトなどなどテーブルが埋まるほどの物が置いてある。

けれど、そこには僕と彼女しかない。

「なんでこうなるの、私が一体何をしたっていうの！」

バンつと勢いのままテーブルを叩いたのは、三月うさぎことマコト。彼女は今、頭から紅茶まみれになっている。

ちなみに僕は帽子屋ことカナデです。

「取りあえず、拭いたら」

帽子の中から取り出したタオルをマコトに渡す。

「突然わめき散らして、しかも紅茶ぶっかけるとか意味わかんない！！」

マコトはさっきまで座っていた少女の席を睨みながら尚も怒鳴っている。

僕たちは一日中お茶会を開いて、狂ったように紅茶を飲む。

少女は森に迷い込みここへやって来た。そして少女も楽しそうにくだらなく紅茶を飲んでいた。

マコトはあらからタオルで拭き取ると服についた紅茶のシミまできれいになくなり、すっかり元通りになった。

役目を終えたタオルはもうマコトの手に無い。

「マコト、怒った理由。本当にわからないの？」

顔に？マークをつけて僕を見る。マコトは素直だ。そして単純で、恐ろしく鈍い。

「アリスが許せなかったのはマコトのスニーカーだよ」

マコトは赤色のスニーカーを片方だけ履いていた。

水色のワンピースを着た少女アリス。綺麗に手入れされた髪にピカピカの靴。少女はどれもそろっていた。

「スニーカー？そんな私の自由じゃん。ハートの女王だって文句言ったりしないし」

「女王は僕たちなんて眼中にないから」

「マコト、アリスが言った事よく思い出してみて」

アリスはマコトの隣りに座っていた。

一緒に紅茶を飲み、ケーキを食べ、クッキーをつまんでおしゃべりしていた。

アリスの手からクッキーがぼろりと落ちた。僕たちは落ちた物は消えるのを知ってるけど、アリスは知らなかった。

落とした先を追って、アリスの目はテーブルの下に落ちた。

そこで見たのは片方だけの赤色のスニーカー。

それを目にしてアリスは顔を真っ青になって叫んだ。

「何よコレ、どうしてコレがあるのよ！…こんなのおかしいわ、狂ってる！！」

マコトに思いっきり紅茶をかけて森へ逃げていった。

「アリスはついに気づいたんだ。このお茶会の意味に、ここがどんなのかも」

空席だらけのお茶会、半分に割れたカップ、片方だけのスニーカー、太陽の光が入らない森、ランプなしでは何も見えない場所。

この世界は足りないものばかり。

「そう、やっと気づいたんだ。30回目にしてやっと」

「52回目だから」

「そんなにも繰り返してるの、この夢」

アリスはやつと気がついた。不思議の国が彼女自身である事に。自分の夢

「でも気づいたって事はこの世界も終わるんだ」

「わからないよ。イモムシに会って全てを忘れてしまつかもしれない。彼は優しいから」

「チェシャ猫に会ってふりだしとかね。あの猫が女王の所に通すはずがないし」

そうやってエンドレスストーリーは続けられてきた。この世界

こんなにもヒントがあるのにアリスは気づかない。気づけない。

それは、この世界の住人がアリスに優しいから。優しくて、過保護。

だからアリスは女王には会わない。

この世界の住人なら誰でも知っている。彼女が女王に会った時が母親この夢が崩れ落ちる瞬間だからだ。

だれも、彼女を女王の所に通したりはしない。

「それでも、ここの時点で気づくって事はもう終わりも近いのかもね」

誰もが世界の終末を背負っている。そう、マコトも。

「大丈夫だよ、マコト。僕は君を離したりしないから」

この世界が終わりをむかえても。

3話、不思議の国のアリスのお茶会（後書き）

不思議の国のアリスはこのような話ではありません。あくまでも題材に使っているだけです。あしからず。

4話、おはじき（前書き）

今回のお題。

場所：花咲じいさんの桜の下 小道具：おはじき

始めのセリフ「私の事なんて何も知らないくせに…」

終わりのセリフ「どうぞゆっくりしていつて下さい」

4話、おはじき

これはまだ、近代と呼ばれる時代からさらに昔の日本。

そこは山と田んぼに囲まれた、本当の田舎の集落。

その集落を見渡せる小高い丘に堂々と一本の桜が花を咲かせてそびえ立っている。

その桜の木に赤色の着物を着たマコトが息を切らせて走ってきた。

マコトは桜の木に片手をついて、息を整えようとした。けれど手をついた方とは反対の手で拳をつくり、ドンっと強くたたきつけた。「私の事なんて何も知らないくせに……」

マコトの拳はより強く堅く握られ、何かに必死に耐えていた。しかし、耐えきれなかつモノがマコトの頬をつたって一粒一粒流れ落ちる。

誰もいない所に逃げてきたのに、ここまできて私は何を我慢しなきゃいけないの。とマコトが拳から力を抜こうとした時だった。

「この桜は年寄りだから大切にしておけないといけないよ」

誰もいないと思っていた桜の木の後ろからカナデがひょっこりと顔を出した。

マコトは慌てて頬の涙を拭った。

「なんでカナデがここに……」

カナデはマコトの涙には一切触れず、ふわりと笑ってからチョイチョイと手招きをする。

誘われるまま行くとカナデの前には大量に散らばった色とりどりの小石。つまりおはじきが散らばっていた。

そしてカナデの手には大きな穴の空いた袋。

「……本当、何してんの」

「いやあ、思いがけないことってよくある事だから」

「あまり無いことだから思いがけない事なんですよ」と喉まで出かったが、マコトは黙っておはじきを拾うのを手伝った。

もし「どうして？」と問われたら、マコトは「そういう気分だったから」と答えていた。

けれどカナデは何も問わないし、聞き出そうとしない。

ふと気になってマコトはおはじきを拾いながら口にした。

「ここの桜って咲いてたっけ？」

マコトの記憶にある桜はいつも枯れていた。見上げた木はいつだって寂しかった。

「花咲じいさんが咲かせたんだ」

「そうなの。キレイね」

「そうだね」

マコトは桜からカナデに視線を移した。するとカナデと目が合った。またカナデはふわりと笑う。

「マコト、この桜は散らないんだよ」

「えっ、花びらが落ちてるじゃない」

おはじきの落ちた地面にはピンクの花びらが結構落ちている。

「これはね、花咲じいさんが来た時だけ桜が舞うんだ。犬のシロは死んでも、白になっても、灰になっても生きている。今度花咲じいさんと一緒に来てみるといいよ。シロがじいさんにじゃれてるのが分かるから」

一人の老人が訪れると風もないのに桜吹雪のように舞い落ちる桜の花びら。

落ちた花びらの数がシロの想いなのか、とマコトは思った。

「シロは健気ね」

「それだけじいさんの事が好きなんだよ」

今は犬のシロの姿はどこにもない。あるのは不思議な桜の木だけ。残るのは想いだけ。

できれば側に居たかった。マコトには痛いほどシロの気持ちが分かった。

「…父さんにね、嫁に行けって言われたんだ」

「……マコトもそんな歳か」

「そんな歳よ」

「相手はどんな人？」

「まだ決まってるない。これから頭下げて私をもらってくれる人を探すんだって！全く、私をなんだと思ってるのよ！！」

「マコトはお嫁に行きたくないの？」

「…こんな風には行きたくない。父さんの言う事には逆らえないけど」

親に逆らうことなど考えられない時代。親の言うことが絶対の時代。

「…つまりマコトのお父さんに是非、マコトを下さって頭下げてくれる人にお嫁に行きたいって事？」

「……そういう事になるかな」

「ふーん、そうなのか」

カナデは最後のおはじきを拾い終えた。あいた穴を手で押さえて袋をじゃらじゃらと鳴らす。

「手伝ってくれてありがとう、マコト」

「いいよ。それにまた落としそうだし一緒にカナデの家に行く」
歩き出したマコトをカナデは呼び止めた。

「マコト」

「ん？どうしたの」

「僕がマコトのお父さんに頭を下げるから僕の家においで」

「…ちょっと、それがどういう意味かわかってるの！」

「わかってるよ。だからね」

「どうぞゆっくりしていつて下さい」

お茶でも飲んでいけと言っているような軽さでカナデは言う。

しかし、マコトはカナデという人物を知っている。

カナデは重要な事ほど軽く伝える人だと。

だからマコトは何も言えなくなってしまった。

ただ側に居ることを望んで、それが叶わない事を父親から言い渡され、そして当人から側いる事を望まれた。

マコトの頬に涙が伝って落ちる。

その涙は悔し涙でも悲しい涙でもなかった。

4話、おはじき（後書き）

神の視点で書いたけどなるのかしら？不安だわ
童話「花咲じいさん」についてはWikipediaを参考にして
います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1487v/>

紙コップ

2011年9月5日03時29分発行